

林東源著(波佐場清訳) 『南北首脳会談への道』

岩波書店, 2008年

『임동원 회고록 피스메이커: 남북관계와 북핵문제 20년』 중앙 books 2008年とほぼ同時期に日本語版として翻訳出版された本書は冷戦の終結以降、南北関係および米韓関係の中枢を担ってきた林東源長官による朝鮮半島をめぐる国際関係の内幕と韓国の政策決定過程を克明に描いた生の記録である。読者は本書で展開されるエキサイティングなドラマに引き込まれると同時に、これらの内容が今後の研究に最大限活用しうる貴重な外交史料であることに気付くであろう。

たとえば2000年の南北首脳会談において金正日総書記が統一後の在韓米軍の駐留を「容認」したことが興味深い事実として明らかにされている(64ページ)。ここから在韓米軍撤退を主張する従来の北朝鮮の路線に対して微妙な含意を読み取れよう。また、アメリカのペリー報告が実際は林東源長官のアイディアの多く反映したものであることが描かれており(249-250ページ)、その意味ではクリントン政権末期において米韓両国が北朝鮮に対して共同関与路線を維持しえたことも頷けよう。本書の中にはこうした逸話は枚挙にいとまがない。すでに漏れ伝えられてきたいくつかの「秘話」もあるが、元政府高官の回顧録としてまとまった形で残されたことの意義は大きい。

本書はこうした外交史料として貴重な価値を持つことは言うまでもないが、著者の豊富な経験と綿密な理論体系に裏付けられた確固たる対北朝鮮戦略論であることは改めて強調されても良からう。太陽政策の設計者といわれた著者の構想はまさに金大中政権および盧武鉉政権の対北朝鮮政策の核をなしてきた。本書で提示されるグランドストラテジーは以下の点に集約されよう。

すなわち、米韓同盟と自主国防で戦争を抑止(ピースキーピング)するとともに、和解と協力

を通して北朝鮮を変化に導く(ピースメーカー)を並行させるということである(198ページ)。したがって、太陽政策は宥和政策ではなく強固な安全保障を基盤とした強者による積極的な対北朝鮮関与(engagement)政策であるといえる。また、和解協力を推進させる方法としては「先易後難」「先民後官」「先経後政」「先供後得」との漢字16字としてその核心が端的に表現された(246ページ)。

このような太陽政策に対しては、南北関係の改善と緊張緩和や北朝鮮の変化に寄与したという見解がある一方で、太陽政策は北朝鮮の核開発を阻止できず、改革・開放に導くことに十分な成果を得ることはできなかったとの批判がある。

これらの批判的な見解に対して、第1に、著者は北朝鮮の核開発は米朝関係の産物と捉えており(412ページ)、太陽政策と北朝鮮の核開発に関連性を見出さない。また、かりに、北朝鮮の目的が核保有それ自体にあるとすれば、韓国の政策如何にかかわらず、核開発は進展するであろう。いずれにせよ、太陽政策と北朝鮮の核開発との間に因果関係を見ることは確かに困難である。第2に、太陽政策と北朝鮮の改革・開放の関連性については、著者は北朝鮮の漸進的変化論に立脚し、他のアジアの社会主義諸国が一党独裁政権下で改革・開放を進めているように北朝鮮もその道を行かざるを得ないとみる。したがって、太陽政策は北朝鮮が変化できる条件と環境を作って改革・開放を導くものであり、また、量的変化の蓄積は質的变化をもたらすと確信している(303ページ)。

こうした著者の議論は論理的で説得力を有するが、たとえば、韓国の対北朝鮮支援が北朝鮮の核開発に転用されているのではないかとの疑念も提起されている。また、北朝鮮の変化については、自らの必要性和内面的論理に基づいて変化してい

るにすぎないとの対抗仮説も提示されよう。現段階ではいずれも仮説の域をでておらず、実際には、こうした評価それ自体が自らの持つ対北朝鮮認識と国際関係に対する世界観に多く起因しているように思われる。その意味では、太陽政策の真の評

価は今後の南北関係および米韓関係の展開によって実証されるのを待つことになるだろう。その時、本書は改めて評価されるのかもしれない。

(中戸祐夫 立命館大学)